

ナシ黒星病（病原菌：*Venturia nashicola*）

○ 被害と発生生態

本病は、葉や果実、りん片、花そう基部、新梢に発生する。葉では裏側の中肋や葉脈に沿って黒いすすが盛り上がったような病斑が形成される。葉柄に発病すると落葉しやすくなる。幼果では、黒いすすのついた病斑を作り、病斑部の肥大が劣るため奇形果となる。果実の肥大に伴い病斑部がかさぶた状となり裂果化の原因となる。また、果柄に発病するとやがて落果する。

黒星病菌は、分生子と子う胞子の2種の胞子をつくる。芽のりん片の病斑が基部に達すると芽基部病斑となり、病斑上に分生子が形成される。これが伝染源となり、開花初期頃から少なくとも5月下旬まで、降雨のあるたびに周囲に飛散する。また、子う胞子は落葉上に形成され、3月中旬から5月下旬頃まで飛散する。これらの胞子は葉や果実などに感染し、次々と伝染を繰り返す。10月から11月頃には、病斑上に形成された分生子が芽のりん片に感染し、翌年の伝染源となる。

本病の発生は品種間差がある。一般的に果実の感染時期は開花期頃から6月上旬頃までであるが、最も感受性の高い「幸水」は、満開75～90日後に最も感染しやすくなる。

○ 防除方法

(ア) 耕種・物理的防除

- ・本病の第1次伝染源は、落葉に形成される子う胞子とりん片病斑上に形成される分生子である。そのため、休眠期に落葉を適切に処分し、開花始めまでりん片発病芽を基部から切除する。
- ・枝が多く過繁茂になると発病を助長するので、剪定時に必要以上の枝は残さない。

(イ) 薬剤防除

- ・開花直前（発病芽基部病斑上の胞子形成抑制）、満開10日後頃（発病芽基部病斑上の胞子形成抑制、落葉からの伝染防止）、新梢発育停止期（新梢への感染防止）、落葉前（りん片への感染防止）が重要な防除時期である。
- ・耐性菌の出現を回避するため、同一系統の薬剤を連用しない。なお、EBI剤の耐性菌が県下の一部で発生しており、効果が認められない場合は他の薬剤を選択する。



葉の病斑



果実の病斑

